

施設イチゴの IPM で飛ばないナミテントウを導入 するためのノウハウ

○田中雅也・八瀬順也・松原由加里（兵庫農技総セ）

ほ場への定着性が高い遺伝的に飛翔能力を欠くナミテントウ系統（以下、飛ばないナミテントウ）が作出され、様々な作物で利用法が検討されている（Seko et al., 2008、他）。演者らも、新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業「多種多様な栽培形態で有効な飛ばないナミテントウ利用技術の開発」により 2008 年度から 3 年間、飛ばないナミテントウを基幹とした施設イチゴの効果的なアブラムシ類防除法について検討した。施設イチゴの IPM 体系に飛ばないナミテントウを導入するため、これまで明らかにした密度抑制効果が得られる放飼方法、安定した効果を得るため栽培現場において実施可能な支援技術および生物農薬として利用する場合に問題となる生理・生態に関する留意点について紹介する。

【効果的な利用法】

- ・有効な放飼方法・・・2 齢幼虫を 10 頭/m²、1 週間間隔で 2～3 回放飼（農薬登録申請中）
- ・効果的な放飼時期（放飼適期）・・・株あたり 50 頭以下のアブラムシ密度

【効果を安定させるための支援技術】

- ・放飼時期の把握・・・マルチ、葉上のアブラムシの甘露、脱皮殻を指標とする発生程度の確認
- ・アブラムシ多発生時の対処法・・・気門封鎖型殺虫剤を併用し、一時的にアブラムシ密度を低下させてから飛ばないナミテントウを放飼する
- ・併用可能な薬剤・・・施設イチゴで使用が想定される主な薬剤について、飛ばないナミテントウの殺虫活性を調べ、併用可能な薬剤を明らかにしている
- ・薬剤散布の物理的影響・・・薬剤散布による鞘翅とマルチの接着による消耗、死亡が確認されたが、影響の少ない散布時期の検討や株間に敷きワラを設置する等の対策により、これら物理的影響は軽減できる

【利用上の留意点】

- ・休眠性・・・12 月末に放飼した幼虫は 2 月末に成虫になったが、1 ヶ月以上活動性が低く休眠状態にあったと考えられ、密度抑制効果は期待できなかった。幼虫期間の短日条件が休眠に関与したと考えられ、この時期の放飼は留意が必要になる。なお、休眠状態の成虫はそのまま施設内に留まり、春先に休眠から覚醒し、産卵を開始するので、次世代虫と合わせた密度抑制効果が期待できる。